《書評》：ミンガド・ボラグ著『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』

「スーホの白い馬」は本当にモンゴルに存在しないのか?

内　田　敦　之

今回取り上げるミンガド・ボラグ著『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』は、同じ著者による単行本『「スーホの白い馬」の真実－モンゴル・中国・日本それぞれの姿』に一部加筆した作品である。この単行本は2016年に出版されているが、その当時はそれほど注意を払わずパラパラと流し読みしただけだった。それから数年たった2020年12月、著者のボラグ氏と同郷のチャハル・モンゴル人の旧友ソイルト氏の論争がSNS上で起きた。ソイルト氏は「『スーホの白い馬（Su'hiin saaral mori）』はチャハル地方で昔から語られてきた民話だ。ないというのはウソだ」と訴えていた。

その論争から半年ほどした2021年初夏、ソイルト氏と十数年ぶりに再会する機会があった。その時ふたたび「『スーホの白い馬』が存在しなかったというのは真っ赤なウソ。ずっと昔から故郷にあった物語だ。今度は新書本が出たが、この本には問題が多い」と、本書を渡された。この著作について意見を求められたこともあり、今度は少し身を入れて読み始めた。本書にはモンゴルの歴史や文化、中国との関係などを紹介した点について学ぶところがあるものの、「スーホの白い馬」が存在しないという点においては腑に落ちないところもあった。

ボラグ氏は「モンゴル国はもちろん、中国内モンゴルにおいても『スーホの白い馬』と言う物語は存在しない」（p.3）、「実は『スーホの白い馬』の舞台であるはずのチャハル草原には、『スーホの白い馬』という物語や伝承はない」（p.79）と主張している。同氏は『スーホの白い馬』がモンゴル民話でない理由として以下のような項目を挙げている。

（1）民話の体裁をとっていない。

（2）モンゴル文化と矛盾するところが多い。

（3）チャハル草原には世襲制王爵に通じる王がいなかった、などである。

民話でないことを言えば「存在しない」証明になるだろうか。民話以外の形で存在することも考えられるだろう。しかも、日本の『スーホの白い馬』がモンゴル民話そのものでないらしいことは、著者が本書冒頭から何度も主張していることである。ボラグ氏によると、漢人（中国人）作家の塞野が1951年にチャハルのドローンノールでウルジーという弾き語りの芸人から馬頭琴物語を初めて聞いたという。塞野は物語を漢語（中国語）で『馬頭琴』という作品にした。この『馬頭琴』は1954（55？）年に『内蒙古日報』で初めて発表された

という。そして、この『馬頭琴』を大塚勇三が日本語に翻訳した作品が『スーホの白い馬』なのである。つまり、『スーホの白い馬』はチャハル地方で採取した民話をそのまま日本語にしたものではなかった。塞野による漢語の物語を大塚が翻訳した作品なのである。当然ながら翻訳時には読者にわかりやすいように文化面での改変も行われただろう。しかも、ボラグ氏によると『馬頭琴』は1950年代の階級闘争やプロパガンダが色濃く盛り込まれているという（pp.150～154など）。このようなプロセスを経て成立した『スーホの白い馬』が「…モンゴル人にとってはあり得ない、きわめて不自然な描写も多数散りばめられている（p.3）」のは十分あり得ることなのではないか。とは言うものの、その改変もそれほど大がかりなものでなかったことは、現地調査で聞いた馬頭琴物語の多くが「塞野版『馬頭琴』に近いものばかりだった」（p.79）と著者が書いていることからもわかる。漢語の『馬頭琴』と日本語の『スーホの白い馬』の表現上の相違点については、ボラグ氏が詳しく一覧表にしている（pp.32～33）。さらに、著者が現地調査で日本の『スーホの白い馬』をモンゴル語に翻訳して聞き取りした際、チャハル出身の対象者が「知らない」「うっすらと覚えているだけ」と答えたという。「うっすらと覚えてるだけ」と答えたということは、「チャハルに存在しない」「モンゴル人が知らない」というのもまた当たらないのではないか。

ボラグ氏は「1950年代のモンゴル語の書物には塞野版『馬頭琴』と同じ内容の物語はなかった」（p.23）と書いている。その一方で、現地調査で聞いた「白い馬の物語」や「馬頭琴の伝説」が「一般的に口伝として語られていた当時は、書物などに書き留めて記録しておくことが習慣として定着していなかった」（p.81）とも書いている。つまり、必ずしも書物がなかったからこの物語がチャハル地方になかったことの根拠としては十分ではないことをボラグ氏自身が書いている。

口承文芸の研究者である藤井麻湖氏は、馬頭琴伝承について書いた論文の中でモンゴル国で出版された *Khuuriin tatlaga*（*Хуурын татлага*）（馬頭琴の旋律）というモンゴル語の書物から7話を抄訳して紹介している。そして、それらを「スフ（「スーホ」は「スフ」というモンゴル語の漢語なまり）型」「ナムジル型」「仏教型」の3つに分類して分析している。その7話のうち2話の主人公の名前がまさに「スフ」なのである。藤井氏は現地に存在もしない民話を分析して数十ページにも及ぶ論文を執筆したのだろうか。ボラグ氏は、本書の元になったという論文（2013）に「同氏（藤井氏：内田注）は著書の中で馬頭琴伝承として7話を引用している。筆者も藤井氏が引用している話を含めて馬頭琴の起源伝説であると考えられるモンゴル語の文献を多く所有しているが、その多くが採話された年代や場所が明白ではないうえ、すべてが1980年代以降に出版されており、本当に伝説であるかどうか判別するのが難しいので本稿では参考にしなかった」と研究対象からはずしている。本書では参考文献にも加えていない。まさにスフという主人公が登場する物語を取り上げている

藤井氏の論文を研究対象にしなくて本当に良かったのだろうか。また、ボラグ氏は藤井氏が引用している話を含めて馬頭琴に関する文献を多く所有していると書いているが、スフが登場する文献だけは所有していなかったのだろうか。

冒頭に書いたようにボラグ氏の「存在しない」という主張に対して、同じチャハル・モンゴル出身者が「存在する」と真っ向から反論している。ソイルト氏は、小さい頃からこの物語を聞いて育った、また、弾き語りをしていた叔父のロブサンワルダン氏もよく「スフ」を語っていたという。「存在しない」というボラグ氏の主張を叔父に紹介したところ、非常に憤って「きちんと反論しなければならない」と言っていたとSNSで紹介している。また、長年モンゴルの口承文芸研究をされてきた東京外国語大学の蓮見治雄名誉教授（故人）も「根も葉もないこんな馬鹿な話はない」と語っていたとSNSにアップしている。残念ながら、お二人とも反論を発表されないうちにお亡くなりになってしまった。SNSでボラグ氏が反論しているように、確かにソイルト氏の「でっち上げ」「作り話」「愚作」「嘘」などの言葉づかいには先輩としての配慮が足りない。その一方で、ボラグ氏がソイルト氏のコメントに対して「あの本（本書の元になった単行本：内田注）はレフェリー付きの学術論文をベースに書かれたものです。それの意味を分かると思いますが」と反論しているが、レフェリー付きの学術論文であれば、全てが正しいと言えるのだろうか。同郷のモンゴル人が「ある」と言うなら、自らの結論を再検証する必要があると考えるのが真摯な研究姿勢ではあるまいか。

上記のように、ボラグ氏の論の進め方には理解しにくく、「スーホの白い馬」が存在しないという結論についても納得できない点がある。ボラグ氏は悪魔の証明に首を突っ込んでしまい、「スーホの白い馬」が存在しないことを十分に証明できていないと思う。

ボラグ氏の本当の目的は何だったのだろうか。ボラグ氏は本書で、故郷である内モンゴルを含む中国領モンゴルが漢人の移民・開墾に始まり、中国の植民地になり長年蹂躙されてきた歴史を紹介している。その過酷な歴史の追体験によって、漢人作家による『馬頭琴』が翻訳されて60年も日本で読み継がれている作品を否定し消し去ってしまいたいという思いに駆られたのだろうか。否、ボラグ氏はあとがきで「本書の意図は『スーホ』を否定的に捉えることではない。ましてや『スーホの白い馬』やその原典である塞野版『馬頭琴』の制作者や彼らの功績を否定するつもりはないし、馬頭琴の起源にまつわる話をすべて否定しているものではない（pp.262～263）」と、私の推測をきっぱり否定している。少し安心すると共に、ボラグ氏の真意がますますわからなくなってしまった。

存在しないことを証明できていないと言っても、『スーホの白い馬』を題材にしてモンゴルの遊牧文化や日本と内モンゴルの関係、また、中国の植民地となって久しい中国領モンゴルの様々な問題などを幅広く紹介した本書の価値は否定されるものではない。大学でモ

ンゴル語を専攻して以来、長年モンゴルと向き合ってきた私にとってもたくさんの学びがあったことをここに記しておきたい。

ボラグ氏は本書のあとがきで「『スーホの白い馬』を優れた文学作品として評価するとともに、今後も日本人とモンゴル人を繋ぐ懸け橋になり続けてほしいという思いを前提に（後略）」（p.263）「（前略）モンゴル文化を守り、それが正確に発信されることを望む（後略）」（p.263）と書いている。ただ、これまで60年にわたって日本人とモンゴル人の交流の大切な懸け橋となってきた『スーホの白い馬』を本書で「モンゴルには存在しない」「モンゴル民話ではない」「モンゴル人が知らない」と完全に否定してしまった。それだけでは飽き足りなかったのか、「彼（スーホ：内田注）自身が勝負に目が眩んで大切な馬を犠牲にした張本人であると言うこともできよう」（p.89）と、白い馬をスーホに殺させることまでしている。感受性豊かな子ども時代に初めてモンゴルの民話にふれて感動し、スーホや白い馬に同情して涙した日本人の気持ちを少しでも思いやる心があったなら、もう少し慎重な表現の仕方があったのではないか。このように全否定するような書き方では、ボラグ氏があとがきに書いたような結果がもたらされるとは考えにくい。さらに言えば、ボラグ氏も長年にわたって『スーホの白い馬』をテーマにあちこちの小学校の授業に呼ばれ、日本の子どもたちや大人に対して馬頭琴を演奏し、モンゴルの文化を紹介する機会を与えられ、また、それによって生活の糧の一部をも得てきたはずである。それにより積み重ねた経験によって本書が出版できたのではないだろうか。もしかしたらボラグ氏は、スーホの恩を仇で返してしまった（Achiig bachaar, tusiig usaar：モンゴルのことわざ）のではなかろうかと他人事ながら心配してしまう。また、子どもの頃に『スーホの白い馬』を読んで感動した心に本書で冷や水を浴びせられた日本人が今度は、「スーホの物語は本当は存在しなかったんですよ」「モンゴルのお話でも何でもないんですよ」などとしたり顔で別の日本人の心に容赦ない冷や水を浴びせるのを想像すると、悲しく寂しい思いがこみ上げてくる。

本書の元になった論文が2013年に発表されてからすでに9年、単行本が2016年に出版され、さらに本書が2021年に出版されている。ウィキペディアの「スーホの白い馬」の解説もほぼボラグ氏の2冊の本からの引用である。私のような者が小さな声を上げたところで、どこにも届かないのかも知れない。私も、モンゴル語を学んでからは『スーホの白い馬』を題材にして日本の子どもたちや大人にモンゴルの生活や文化について長年紹介してきた。日本人とモンゴル人の交流にとって長年にわたり大切な役割を担ってきたスフ（スーホ）と白い馬をねぎらう意味でもささやかな声を上げさせてもらった。

〈参考文献〉

Erdenechimeg, L., *Khuuriin tatlaga*, Ulaanbaatar, 1994.

藤井麻湖 2003「馬頭琴伝承」『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社.

ミンガト・ボラグ（宝力嘎）2013「『スーホの白い馬』は本当にモンゴルの民話なのか」『日本とモンゴル』第47巻第2号（126号）.

ミンガト・ボラグ 2021「『スーホの白い馬』の原話『馬頭琴』の誕生に関する考察』『日本モンゴル学会紀要』第51号.

ミンガト・ボラグ 2021『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』扶桑社.